みやの森通信

発達凸凹文化の創造を目指す　第44号:2026年03月26日発行　編集長:家森　謙
Ponteとやま(みやの森カフェ)　富山県砺波市宮森303　電話:0763-77-3733
メール:miyanomori.ponte@gmail.com
Ponteとやま　facebook　検索

99歳 つれづれエッセイ vol.27

我が青春時代

　中学生になると女学生の噂など話題にして楽しんでいるグループがあった。彼等を軟派と呼んだ。
しかし、今考えると彼等は次第に軍国主義に向かう世相に抗し、学校生活をエンジョイしていたのかもしれない。当時私達が下校するときは数人が連れ立って歩いたものだが車の通行もない東海道の松並木で女学生の集団に出会う事もあった。
相手の方が少ないとき、仲間のTが「頭（かしらー）右」と号令をかけて彼女達をからかう。相手は顔を真っ赤にして駆け抜ける。その逆に仕返しもある。ある時Tと二人で歩いていたら折悪しく「敵」の一団と出会ってしまった。「こりゃまずいな」と思いながらうつむき加減に通り抜けようとしたら、連れのTが何を思ったか突然私から離れ顎を突き出して大股に「おいちに」と手をふって彼女達の列に突入したのである。驚いた彼女達は「キャアー」と言って列を乱した所で通り抜ける事が出来た。彼は達磨祭りで有名なお寺の長男だが、腕白な生徒で、学校の周りを流れる小川から赤腹のイモリを数匹捕まえてきて箱に入れて、教師の来る前に机に置いて反応を楽しんだりした。女教師でもいたら恰好な餌食になっていただろう。彼のあだ名は駄坊（だぼ）である。しかし彼は秀才で書道も優れていたし、柔道も強かった。三年の時（五年制）全国柔道大会に補欠に選ばれた。そんな彼に私は校内柔道大会で勝った。後年同窓会で「お前の柔道は極端な右自然体で吸い付くような足技の得意な嫌なやつだった」と述懐していた。
因みに私は後に正攻法で内股等の大技を身につけ五段に昇段した。彼は時を経てこの地で父の後を継いで名刹の住職になり、地元新聞には風流説法を寄稿して多くの人に親しまれていた。
私が北陸に去るとき、「お互い長生きしようぜ」といって別れたが、最近彼の訃報をきいた。
この後、恋のプラットホームとして妻のことを書くつもりでいたが後がない。次に譲ろう。

伊藤博芳(みやの森カフェのお父さん)

タカチ動物園特別編

開園前夜

幼少期より生き物は好きで、金魚やカブトムシを飼育したが、
意外にも動物園を開園するまでは爬虫類を飼育したことはなかったし、
ヘビを触ること自体もおっかなびっくりだった。
ではなぜ『園長』と名乗り、『タカチ動物園』を始めたのか？
あまり話題にしてこなかったが、これはタカチ動物園の核心(コア)な話だ。

話は2017年4月まで遡る。とある生き物の展示施設にかかわることになった。しかし、その施設は問題だらけだった。展示される生き物も少ないし、お客さんの満足度も低かった。
ならばと色々なアイディアを出したが、新参者があれこれ言うのは、古参の人間からすれば面白くない。結局僕はその施設を追われることとなった。つらく、悔しく、悲しい。憤った。自分のアイディアの正しさを証明したい。そこで自身の名を冠した動物園を開園することにした。さらにGWに運転中、カップルに後ろから追突され、事故の責任が10対0だったため、そこそこの慰謝料が転がり込んだ。
強い動機と潤沢の資金があれば、人はアポロ計画で月に到達することもできる。タカチ動物園も同様。ここからタカチ動物園はスタートを切った。

当初、飼育しやすいアカハライモリ、動作が面白いアズマヒキガエル、日本を代表する無毒の蛇アオダイショウの展示を目指した。
といっても手元に生き物はいない。ペットショップで購入するような生き物ではないため、捕獲(みやの森通信第32号 タカチ動物園特別編掲載[令和6年5月発行])、飼育(みやの森通信第30号 タカチ動物園特別編掲載[令和6年1月発行])しないと始まらない。しかも施設を追放されたことで常設展示の夢は潰え去っている。結果(流浪の移動動物園)としてタカチ動物園は展示できるイベント、場所を探すこととなる。ところが、説明しても分かってもらえない。
内容を理解できても「気持ち悪い」「ウチでは出来ない」と言われる始末。

路頭に迷ったタカチ動物園を最初に注目して「面白い」と言ってくれたのが、みやの森カフェさんだった。生き物の魅力を伝えたい。
そのために展示を考え、説明を考え、衣装を考えた。
恐らくほかの施設ではここまで自由にはできなかっただろう。
全て“自分で”考えお金を出し、自己責任だからこそ可能となった。スタート時ある目標を掲げた。
それはTVに映ることだったが、それは3年で達成した[※1]。自分の正しさを証明した瞬間だった。

消耗が激しいのでお勧めはしないが怒りや悲しみ、恨みは強い原動力となりえる。
まさに『哀(アイ)と幽鬼(ユウキ)だけが友達さ。』である。

[※1] (家森追記)タカチ動物園2021年元旦TV出演告知はみやの森通信第9号掲載[令和3年2月発行])

実践報告

コミュニティ政策学会
冬季シンポジウム
2026年2月15日

2026年2月15日、コミュニティ政策学会の冬季シンポジウムがオンラインで開催され、私たち「Ponteとやま（みやの森カフェ）」が実践報告を行いました。テーマは『地域コミュニティとまちの居場所』。孤立が深まる現代において、居場所が持つ役割を問い直す貴重な機会となりました。

前半は専門家による理論報告が行われました。立命館大学の小辻寿規氏は、孤立を個人のせいではなく「社会構造の問題」と捉え、誰もが自由に過ごせる居場所は、地域の課題を早期に見つける「ハブ（拠点）」になると指摘。京都府立大学の平本毅氏は、会話分析の視点から、居場所での何気ないコミュニケーションがいかに豊かな繋がりを育むかを説かれました。

続いて私たちは、加藤家の庭先に作った小さなカフェから始まった11年間の歩みを報告しました。当初は「よそもの」として始まった活動も、今ではフリースクールや就労支援、シェアハウス運営へと多角的に広がっています。最近では、地域の方がふらりと立ち寄られたり、除雪の相談が舞い込んだりと、地域の一部として溶け込みつつある手応えを伝えました。

今回の大きな収穫は、専門家と住民が自然に混ざり合う「ブレンディングコミュニティ」という考え方です。支援する・されるという枠を超え、伝統的な「地縁」と、想いでつながる「志縁」が補完し合うことで、誰も排除されない豊かな社会が形作られます。

「居場所とは、本来の日常を取り戻し、自分らしく生きられる場所」。Ponteに関わってくださる皆さんと共に、これからも様々な「混ざり合い（ブレンディング）」を楽しみながら、かけがえのない日常を大切にしていきたいと、思いを新たにしました。

いただいたもの 及び Ponteとやま(みやの森カフェ)お仕事一覧 2025年12月-26年2月

[いただいたもの] 菓子・野菜・パン・米・餅・おもちゃ・文房具など

12月14日　こどもの居場所座談会事例発表（水野）
12月20日　「動画で発信しよう(テーマ：ヤングケアラー)」参加（加藤）
12月21日　100円おしるこカフェ（市社協・地区社協協働）
1月13日　富山県立雄峰高校教職員研修会講師（水野）
1月18日　おしるこカフェ
1月26日　ヤングケアラー関係機関職員研修会講師（加藤）
1月29日　射水市子ども発達支援室保護者おしゃべり会アドバイザー（水野）
2月 6日　パナソニック教育財団　表彰式＆同窓会出席（水野・加藤・川合・小西・西口）
2月10日　居場所相談会(水野・加藤)
2月15日　おしるこカフェ
2月15日　コミュニティ政策学会zoomにて事例発表

**みなさまのご厚意に
心から感謝いたします！**

みやの森通信 バックナンバーはこちらから
みやの森通信 検索

ホームページはこちらから
Ponteとやま 検索

パナソニック教育財団「子どもの心を育む活動」
設立20周年記念「こころをつなぐフェス」

パナソニックフェス同窓会に行ってきました―2026年2月6日

私たちPonteとやまはなかなか助成金が取れない団体です。「いいこと」をしているのでもなければ「支援」をしているのではないので、「アピール」が書けない。ましてや合言葉は「みんなで儲けよう！」なのでまず無理。ところが、このパナソニック教育財団の「子どものこころを育む活動」は助成金でなくて「賞金」！

そして、2月6日「表彰するだけでなく、つながりを作る！」ということで過去5年間の表彰団体を招いてくれました。特に、私たちが受賞したときはコロナ真っ最中で表彰式もなかったので、拍手を皆さんに改めていただくという場面もあり、ホント嬉しく思いました。
また、選考メンバーのユニークなこと。
グループ分けでは、大阪大学名誉教授の鷲田清一さんとご一緒。グループ討議中私の隣で終始ニコニコ。
前京都大学総長の山極寿一さんは、「犬は人の心理を読むから賢いと言われる。ゴリラやオランウータンは人にはお構いなしで我が道を行く、人の顔色も読まず過去も振り向かず今を楽しんでいる、いつも前向き」という話を力強く話されていました。毎日新聞の小国綾子さんは、私たちPonteの発表の応援人でしたが、若者たちの話に言葉が詰まり涙してくれていました。
Ponteの発表は、ほとんど若者たちに任せました。川合君、まみちゃん、西口君が、自分の生きづらさも交えて子どもたちとの付き合いの中で学んだことを自分の言葉で語ってくれました。
まみちゃんの「黒歴史がオセロみたいにパタンパタンと白になりつつある」の言葉には共感が多く寄せられました。若者たちはマラソンで有名な増田明美さんとも小国さんとも深い話ができていたようです。
まみちゃんは、山極先生に「先生はゴリラやオランウータンと一緒に住んでいるのですか？」と質問していました。「いや～住んではいないけどね」カオルさんはすかさず「富山に来てお話してもらえますか？」「時間が合えばいいよ～」とお返事をもらっていました。
増田さんは「顔が似てるから歌えと言われている」と最後に都はるみの「さよーなら、さようなら、好きになった人」と歌いながら踊っていたし、まじめに司会していたパナソニックの山田さんも、「この人も踊れるんですよ」と暴露されて、最後ムーンウォークしてたし、この突き抜けている空気は衝撃的で、「私たち、これでいいんだ」と思わせてくれました。夢のような一日でした。

全国各地で活躍されている団体の皆さんとお会いしお話しできてとても嬉しかったです。
ありがとうございました！ byゆうじ

遊び心に満ち溢れる大人にたくさんお会いできて私ももっとぶっ飛びたい！と思いました。 byまみ

学校の先生、生徒さん、美容師さん、石垣の合唱の先生などなど、まさにごちゃまぜで交流することができました！　byなおき

弾丸ツアー！

to manimani in千葉

2026年2月6日

2月6日パナソニックフェスの前に、私たちの本を読んで
カフェを開いたという千葉県の「よりどころmanimani」
さんに行ってきました！

朝9時半に東京駅に着いた水野、加藤、川合は千葉県
鎌ケ谷市にある「よりどころmanimani」さんに弾丸ツアー
東京駅からぶどう社の市毛さんの車に乗せていただき、
いろんなお話をしながらmanimaniさんへ。

ちいき新聞

2025年3月14日号

鎌ケ谷版

厳選業者を無料で紹介

0120-033-231

相談もできるみんなの居場所

「ヨリドコロmanimani」

伊藤祥子さん・川崎彩さん

Manimaniさんとの出会いも奇跡に近い。
私が昨年日帰りで行った長野県の上田で40年ぶりに会った
高校の同級生の夫さんが、
「みやの森カフェに似ている活動をしている人がいますよ。
教員辞めて今仲間と二人でカフェやっています」と
おっしゃる。
「えーそれは興味ありますね。つながりたいです」と
言ったら、すぐ電話してくれました。そうしたら、なんと
「私たちはみやの森カフェの本を読んで、きっとできるはず
と信じて始めたんです」と言っているとのこと。
私たちの本はわかりやすいノウハウ本ではないので、
私たちの想いが伝わるかどうかは確信が持てずにいました。
だから余計にびっくり！

今回お邪魔して、お話して、いろんなことを感じました。
支援する・されるの関係ではない居場所、集まってくる
人たちの力を信じてともに生きていこうと思える居場所…
どこにもありそうでなさそうで、何を手本にしたら
よいかもわからない。それでも「やってみよう」と
思っていた人がこの本に出合って、「これなら私たちにもできる」と思えた…私たちも
「想いがあればできる」ことを伝えたかったので、受け止めてくれた人がいることに感激。

とてもかわいいお店で蒸し料理のご飯も豆茶もおいしく、
2階はこどもたちの居場所になっていました。今2年目、制度ではなくカフェという形態、
さらに鎌ケ谷市でも船橋市寄りで、船橋の人が多く来ているとのこと。いろいろ中途半端な
立ち位置だからまだまだ行政からも理解されない、助成金も取りにくい・・・
いっしょいっしょ！

私たち、2年目何やっていたかしら。方向性も見えず無我夢中だったような気がします。
短い時間でしたが初めて会ったとは思えないくらいおしゃべりしました。
さあ、ここから何をしていこうか…一緒に考えていけばいいね。仲間はきっと富山にも
全国にいるはず。このままのスタンスでやっていく勇気と元気をもらいました。

「居場所とは、本来の日常を取り戻し、自分らしく生きられる場所」

2025年度も、シェアハウスLiberoみやの森には、子どもたちと若者たちのエネルギーがあふれる一年となりました。2月、パナソニック教育財団フェスでのプレゼン資料を作るために活動写真を整理していたのですが、「この一年、本当によく遊んだな～！」「いろんなことにチャレンジしたな～！」と感慨深いものがありました。仲間との協働や挑戦を通して、みんなが自分のペースで成長していく姿を見ることができ、本当に嬉しく思っています。

■子どもたちの「やりたい」を形に

今年度は、子どもたちが主体となってたくさんのイベントを企画・運営しました。春まつり、夏まつり、お泊り会、運動会、そして月に一度の「子どもカフェ」。「〇〇をやってみたい！」「そうだね、やろう！」「じゃあ、みんなが楽しむにはどうしたらいいかな？」。アイディアを出し合い、話し合いを重ねるプロセスは、子どもたちにとっても、アシストする若者たちにとっても大きな学びの場でした。
特にシェアハウスで行ったお泊り会では、銭湯に行くのを心待ちにしている子や、自作ゲームを披露したくてたまらない子など、どの子の目もキラキラと輝いていました。大人が用意した「プログラム」ではなく、自分たちで作り上げたという自信が、子どもたちをぐんと頼もしくしてくれたように思います。

■ICTを学びと自己表現の武器に！

今年度、私たちは「学びプラネット合同会社」さんとのパートナー契約のもと、ICTを活用した学びサポート『デジタルシーカーになろう』を本格始動させました。単にタブレットを使うことが目的ではなく、デジタルツールを「インプットとアウトプットのための武器」として活用し、探究心を深めていく試みです。読み書きの困難さのために学ぶことを諦めるのではなく、「これならできる！」という自信を育み、「もっと知りたい」という意欲を引き出し、「学ぶことは楽しい」とより多くの子に感じてもらえるよう、これからも伴走を続けていきたいと思っています。

■赤ちゃん＆サービスドッグ“ジンジャー”が仲間に

こども部門のもう一つの柱が、子育てサポートセンターみやの森PORTです。「いつでも駆け込める港のような場所に」という想いでスタートした毎週金曜日。ふらりと来てくださる方、この日を楽しみに待ってくださる方も増えてきました。金曜日は、フリースクールの子どもたちがママに代わって赤ちゃんを抱っこしたり遊んだりする姿が日常的に見られます。その間、ママたちはお茶を飲んでほっと一息。また、サービスドッグの“ジンジャー”との触れ合いも、みんなに優しさと安心感を与えてくれています。多様な存在が自然に混ざり合うことにより、子どもたちも大人も多くの学びを得ることができています。

他にもPonteでは、野外活動やこどもクラブ、青年期のコミュニケーション講座など、様々な活動に取り組んできました。
2026年度も、子どもたちの「やりたい」を大切に、子どもたちや若者たちと一緒に温かな日常を積み重ねていきたいと思います。

みやの森カフェ

志縁カフェと地縁カフェの融合に向かう

2月15日にZOOM参加したコミュニティ政策学会で、カフェの成り立ちとして「志縁カフェ」と「地縁カフェ」があると聞いて、納得しました。みやの森カフェは、まさに「よそ者」の私が作った「志を縁とする」志縁カフェ。確かに最初は地元の人ではなく、市外の人、あるいは県外の人、そして海外（台湾・シンガポール・香港）の人が多く訪れました。
しかし、昨年まで6年間民生委員をやったおかげで地域に知り合いが増えました。また、地元上村の高齢者サロンもときどきみやの森カフェで宴会をしています。地域の皆さんの持ち寄りの漬物、マカロニサラダやポテトサラダ、黒糖寒天などおいしくて、一緒に参加したPonteの若者たちも「おいしいですねー！」というと作った人もうれしそうです。
昨年11月からは地区社協と協働して、月一回の100円おしるこカフェも始まりました。まだ試行段階ですが、はじめてカフェに足を踏み入れた人もにぎやかにすごしています。

一方で面白いのは、「地域」のとらえ方です。訪れてくれた人たちが交わっていくと、「地域の概念」が広がってきます。金曜日の午後、カフェのお向かいのサイトウさんを中心に隣の村から来る人、隣の市から来る人、隣の県から来る人が集まっておしゃべりしています。気持ちの境界線がなくなると皆同じ「地域の人」になっていく。能登の地震が起きた時は、みんなでお互いを心配していました。どちらにしてもカフェというちっぽけな場の中で、志や地域がつながっていくのは面白いことだなあと感じます。
また、昨年は、ヤングケアラーについての講演依頼や委員への委嘱が県からありました。ヤングケアラーと一口に言っても、その状況が全く違うので画一的な支援は困難です。ただ、苦しい思いをしている若者たち、子どもたちの中に「ヤングケアラーとしての事情」が隠れている場合がある。そこに焦点を当てていく必要性は感じます。みやの森カフェの「ごちゃまぜ」の中にもそれを見ることがあります。「ヤングケアラーの相談窓口」には、相談が寄せられていないと聞きます。
カフェは「ごちゃまぜ」だから自然体でここに存在する・・・
そして、なんとなく仲間ができて、みんなで自分はどう生きていこうか考えてみる。そんなことが起きつつあります。
今年夏でカフェは12年になります。「場」であるのに、まるで生きもののように変化していく・・・これからのことは予想もつかないけど、楽しみであることは確かです。

Mami のつぶやき

前頁でも触れたように、2月初旬に東京で行われた表彰式に参加させて頂きました。本編に載せるほどではありませんが、その時の裏話を少しだけ。

イレギュラーが苦手な私は、東京行きが決まってから毎日心臓バグバグ!!

忘年会が終わった頃から『東京駅』→『葛西駅』の乗り継ぎ動画を1日5回見るという謎ミッションを自分に課し、イメトレをしていました。

（今の時代、何でも動画で見られることに感動！）

当日は、緊張で一睡もできずガンガンの目で新幹線に乗車。

無事に東京駅へ着き予習した通りにホームの階段を降りたのですが、そこで緊急事態発生！

いつも動画に映っていた黄色い服のおじさんがおらず（当たり前）、代わりにFBIみたいな黒スーツのおじさんが立っていたのです！せっかく迷子にならずに来れたのに、そこで完全に思考停止し、3分ロスしてしまいました…。

また今回の会場は皇居近くの霞山会館37階。エレベーターの数字が上がるたびに息がしづらくなり、「あれ？高所恐怖症だったっけ？」と自問自答。37階に着いた時には頭が割れそうなくらい痛くて、心の中で「空気が薄い…私にはセレブ無理だ…」と悟りました。（ちなみに原因は、室温とただの寝不足）

表彰式では、自分たちの活動がしっかり伝わった手応えがあり、素敵な方たちとの出会いにも胸がいっぱいに。あまりに順調すぎて、夜の地震で「え…これ私のせい!?」と思ってしまうあたり、まだまだ未熟者ではありますが、そんな私が東京に行けたこと自体が大きな成長であり、「いろんな人に会ってほしい」と参加させて頂けたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

編集長 家森謙の 目 タスクにするな。今すぐやる

▼「短期記憶が蒸発する」ある会議で講師の方がぼやいていた言葉。筆者もこの年齢に入り、仕事への悪影響を隠せなくなった。老化は酷くなる一方。潔く受け止め、出来ることを積み重ねるしかない▼手段は複数あると思うが毎日必ず見る場所にタスクを書いておくのが最善策と今は思っている。手や腕にメモを書いている人をたまに見かけるが、まさにこれを実践している一例だと思う。カレンダーアプリへの登録や通知は次善策。登録や通知を見ることそのものを忘れてしまう危険が拭えないからだ▼ただし、こなせるタスクの量には限界がある。私は体力や気力が少なく、カレンダーアプリに登録したタスクをこなせる数は月平均25～30件。お恥ずかしい話だが、私が抱え込んで処理できる量はこの程度しかなく、あふれたタスクは諦めて削除している。だからタスクにする案件は数を絞る必要がある。タスクにする前に今すぐやる。何するか自体を忘れないうちに今すぐやる。できないなら最初から身の程知って潔く諦める。「やるなら今しかねぇ」という歌もある▼昔取った杵柄という言葉がある。かつて身に付けた技量は衰えてもなお健在という話。手に職をつける。芸は身を助けるという言葉もある。私に技術は無いが、幸か不幸か長年こなした家事の手は自然に動く。内容にもよるが、何事も努めて前向きに継続的に取り組めば、後々良いことがあるのかもしれない。家事は嫌だけどな